師弟の縁に仍つて此清次郎に助太刀を致す、一人二人は面倒だサア百人でも二百人でも、束に成つて蒐つて來い』と肥前國の住人、信濃守忠吉二尺八寸の一刀を鞘拂つた　忠『其れ皆の者、押取り卷いて殺つて仕舞へッ』　皆『合點だッ、覺悟をしろッ』と ドッと計りに二人を圍んで斬つて蒐つた、必得たりと秋山要助バラ〳〵ッと大勢の中へ、面も振らず大刀を振り廻し乍ら斬り込んだ　要『コリヤ清次郎、俺れは此木葉野郎を叩き斬つて仕舞つて遣るから、其方は信夫忠五郎を討ち取れッ』と呼はつた、清『ヘイ合點ですッ』と清次郎は、今しも斬り下して來て忠五郎の一刀をチャチリンと受け止め、一上一下火花を散らしてチャチリン〳〵と戰つた、秋山要助はドッと斬つて蒐る三百人の乾兒を對手に、奮擊突戰、秘術を盡す千變萬化の大刀風に、見る〳〵内に前後左右に、バッタ〳〵と斬り倒す、此方霧の海久藏、相模の金五郎の二人の者は此有樣を見て大音擧げ　二人『ヤア信夫の忠五郎の野郎能く承れ、吾れこそは上州南瀬田郡大前田英五郎の四天王と呼ばれたる、霧の海久藏、相模の金五郎の兩人だ、三島清次郎に腕貸しをするから其う思へッ』と各々た、大前田の身内でも、霧の海久藏、相模の金五郎と云つたら長刀引抜いて斬り込んだ、信夫の忠五郎は此言葉を聞いて驚い當時日本六十餘州で、長脇差し連中でも、大親分だから斯んな人に腕貸しをされチア堪ら無い、三十六計逃ぐるに若く無しだと思つたか、今清次郎が　清『エイッ』と叫んで斬り込んだ一刀を、ヒラリ体を躱した其途端、バアッと其儘後邊へ飛び退り、踵を返して一目散、大善寺境内を差してバラ〳〵ッと逃げんとする、此体眺めて三島清次郎　清『ヤア信夫の忠五郎、今更に成つて逃げ樣とは卑怯未練な奴つだ、己れッ』と追蒐けんとした此時早く、大善寺境内より、裏山差してドン〳〵〳〵と登つて參つた一人の旅人、遙に此有樣を見て大音聲　男『ヤア〳〵信夫の

忠五郎卑怯にも逃げ樣とて逃がさうか、吾れこそは三島萬太郎の身内にて、其人有りと云はれたる總角猪之助だ、モウ斯う成りア袋の鼠だ、觀念しろッ』と長刀引拔いてドッと計りに斬つて蒐つた、信夫の忠五郎は逃げ出した行手に當つて、總角猪之助が思ひも掛けず現れ出でたから、モウ敵はんと思つたか『忠オッ總角猪之助か、斯う成りア破れ冠れだ、何奴、此奴の用捨は無エ、殺して遣るから其う思へッ』と持つたる一刀取り直し片側の松を小楯に身拂へた　清『オウ猪之助か　猪『ヘイ若親分、殺つて御仕舞ひ成せエ　清『オウ合點だッ』と信夫の忠五郎臨んで斬り付けた、忠五郎も窮鼠却つて猫を嚙むとか、死に物狂ひに『忠『サア來いッ』と夜目にも著るき刄の稻妻、チャン〳〵と斬り結んだ、今總角猪之助が　猪『忠五郎觀念しろッ、エイッ』斬り込んだ一刀を、パッと受止めるのは受け止めたが、刄先き餘つて眉間を二三寸斬つた　忠『アッ』と左りの手で傷口を押へ

たが、此隙窺つた三島清次郎、突然り　清『エイッ』と一聲腦天から首筋掛けて斬り付けた、急所を斬られて何堪りませう　忠『ワアッ』と云つて打倒れる處を、躍り掛つた三島清次郎　清『親、の敵、覺悟しろッ』と、遂々首を討ち落した　猪『ヘイ若親分、御目出度う存じます　清『オ、猪之助、彼方に大勢を對手に斬結んで居られるのは、師匠秋山要助先生と、大前田の御身内霧の海久藏、相模の金五郎と云ふ親分だ早く行つて邪魔する奴つを斬つて仕舞へッ　猪『ヘイ合點です』と彼方を臨んでバラ〳〵、ドッと計りに斬り込んだ、數多の乾兒は人數は澤山だが手の立つ者は一人も無い、對手は天下に有名なる劍道の達人、秋山要助正勝先生が、腕を振つて居る處へ、刀は稀代の業物なり、殊に横から飛び出して來たのが、上州名代の親分二人、其れ丈けで充分手に餘つて居る處へ、後ろの方から總角猪之助が、一生懸命の勇氣を振つて斬り込んだから、殘つた二百人餘りの同勢

はヂリ〳〵と斬り立てられて居る處へ、三島清次郎は信夫の忠五郎の生首を引提げ　清『ヤア〳〵信夫の忠五郎は、三島清次郎が討取つたッ』と大音聲に呼はつたから今迄逃げ足の付いて居る同勢は　皆『ソレ敵はん逃げろッ』とワーッと計りに逃げ出した、此体眺めて四人の者は、追駈け行かんとしたが、斯んなを斬つた處で功にも成らんと、引返して來て片傍の松の根方に腰打掛け、ホッと一息續いた　要『オウ清次郎、信夫の忠五郎を討ち取つたか　忠『ヘイ先生、皆様の御蔭に據つて、芽出度く敵は討ち取りました　要『其れは芽出度い〳〵、併し其若者は其りア誰れだ　清『ヘイ是れが先日から皆様に御話し申しました、親父の身内の者で、總角猪之助と云ふ者でございます　要『フム然うか　清『オイ猪之助、此御方が秋山要助先生と云つて、俺れが古市に居た前頃、種々御厄介に成つた劍術の大先生だ、又此方に御出でに成る御二人は、上州大前田英五郎親分の御身内で

四天王と呼ばれた霧の海久藏、相模の金五郎と云ふ兩親分だ、今度俺れが手前に別れて、此足守へ歸る途中、不圖も播州舞子ケ濱にて御出會申し、御供をして歸つて今日敵討の助太刀をして頂戴いたのだ、能く御禮を申して呉んな　猪『ヘイ左様でございますか……エ、私しは此三島の身内で、總角猪之助と云ふて下奴でございます、秋山先生、霧の海の親分、相模の親分様方此度は私し若親分清次郎が、敵討ちの助太刀をして下さいまして、誠に有難うございます、尚此上共若親分なり私しなり、御見知り置かれて宜敷く御引立の程願ひ上げます』と襟を外し鉢卷を取り、叮嚀に地上へ手を仕へて厚く禮を云つて居る　要『フム總角猪之助と云ふのはお前か、何うも感心な男だ、二年も三年も親分の忰を尋ね廻つて、遂に芽出度く敵を討たしたと云ふ其志しは、武士も及ばぬ氣前へだ、行く〳〵は宜い顔に成れるだらう、併しお前は病氣で伊勢の古市へ殘つて居たと云ふ事だ

が、モウ快く成つたのか

猪『ヘイ若親分が古市を立つた後、二年も三年も苦心をして、ヤッと尋ね當てたと思つたら思ひも仍らず病氣に成つて、若親分と一緒に歸る事も成らず、思へば思ふ程殘念心外で堪りません、何うせ命の無いものなら、早く死んだ方が增しだと思つて、一生懸命に伊勢の大神宮樣を御祈り申し、毎晩〳〵水垢離を取つて居ました處、大分宜く成つた樣ですから、若親分の跡を追つて此處迄歸つて來た處が、信夫の忠五郎と家の若親分とが、大善寺の裏山に於いて果合をすると云ふ事を聞いたので、家へも歸らず其儘駈け付けて來た樣な譯でございます　要『其りア何うも感心〳〵……俳し兎に角一度家へ引揚げて、足守の御町奉行所へも屆けを出さ無きア成るまい　清『ヘイ左樣でございます、其れでは御供を致しませう』と四人打連れ立つて歸つて來る、歸つて來て清次郎から、母親も母親も大に喜び、秋山等三人、涙を

流して禮を述べる、三島清次郎は、信夫の忠五郎の生首を、大善寺なる父親萬太郎の墓に供へ、今迄不幸の御詫びをして立歸る、其處で其夜の內に清次郎は、御町奉行寺井清左衛門樣へ、此事を御屆けに及びました、其處で町奉行寺井殿は、御下役砂田春藏、飯尾勇左衛門の二人を御檢視として差遣はされ、種々御取調べに成つたが、目的が敵討ちで長脇差し同志の喧嘩だから、死骸丈けは其方で始末を付ける樣と云ふ事で、四人の者には御拂ひ無しと成つた、スルと昨日邊りから詰め懸けて居た、三島萬太郎の乾兒共は、續々と詰め込んで來て、急に乾兒が殖へた、其處で改めて清次郎が親萬太郎の跡を續ぐ事に成つたが其披露に霧の海久藏、相模の金五郎の二人が名を出して、三備は申すに及ばず、作州、因州、藝州、遠くは播州、大阪邊り迄知らせたから、一ケ月計り滯在して居る間に、彼是れ四百人計りの大親分に成つた、其所で秋山要助は　要『オイ清次郎、お前

も是れ迄に成つたら、モウ大丈夫だらう、俺れ等はまだ是から金比羅參詣をして歸ら無ければ成らぬ、一兩日の内に此處を出立仕樣　清『先生、今暫らく御滯在を願ひます、其内には此大善寺の祭りも有りますから……　要『イヤ其内又俺れは、一人に成つて諸國を廻つて見る心得だから、其節は立寄る事に仕樣』と止める袂を振り切る樣にして、霧の海久藏、相摸の金五郎を引連れ、備中玉島へ出て來る、此玉島迄は三島清次郎、總角猪之助、其他重立つた乾兒五十何人と云ふ者が見送りに參ります、愈其處から讃岐の多度津へ船で渡るのでございます、其處で見送り人に別れて便船に折乘り、金比羅へ參詣致し、多度津、高松、丸龜抔と、所々方々を見物して、再び大阪へ歸つて參り、其れから大和廻りをして、愈其年十月上州南瀨田郡大前田村へ立歸つて參りました、其處で暫く滯在して居たが、越島は南枝に巢い、胡馬は北風に嘶くどか、久し振りに武州埼玉郡行田の

城下、箱田村へ立歸つて來ると、自分の娘も先年養子をして、早くも子供を二人も設けて有るから、今は此世に思ひ殘す事も無しと、

世の中は唯春の夜の夢なれや
富も譽れも何にかわせむ

と一首の歌を詠じまして、今迄手に掛けて殺した人々の菩提を吊はんと、自分の家の寺なる箱田村の觀朗寺、玄月和尚と云ふ住職に賴みまして、佛緣を受けて雷角齋と號し、諸國修業に廻り、文久二年八月、故郷武州埼玉郡行田の箱田村に立歸りまして、八十二歳を一期として芽出度往生を遂げたと申します、法號は義及玄喜居士と云つて、今に其位牌が殘つて居るそうでございます、また申上げ度い事が澤山に有るのでございますが、本編は一先づ此邊にて大尾と致し置きます、終りに臨み松本金

華堂主人に代り、愛讀諸君に玉秀齋より厚く御禮を申上げます
ヘイ永々御退屈様……。

大善寺山大仏計

雷角齋入道終

明治四十三年九月廿五日印刷
明治四十三年拾月五日發行

雷角齋入道

講演者　玉田玉秀齋　大阪市南區鷹町三丁目二十七番地
發行者　松本善吉　大阪市南區安堂寺橋通二丁目二十六番邸
印刷者　山田元吉　大阪市南區心齋橋通安堂寺町南へ入

賣捌元　田中宋榮堂　大阪市南區八幡筋西横堀木綿屋橋詰
賣捌元　三宅同盟館

不許複製

新講談續刊目次

桃川如燕講演　水呑村九助

桃川如燕講演　後の水呑村九助

一龍齋貞山講演　無敵流劍士　後藤半四郎

玉田玉秀齋講演　豪傑　秋山要助

玉田玉秀齋講演　大善寺山仇討　雷角齋入道

松本金華堂發行

新講談續刊目次

桃川燕玉講演　元祿豪傑　伊庭如水軒

桃川燕玉講演　元祿勇婦　伊庭お糸

玉田玉秀齋講演　八重垣主水輝秀

玉田玉秀齋講演　勇婦　八重垣お菊

玉田玉秀齋講演　姫路騒動　小寺家大評定

松本金華堂發行

新講談續刊目次

一立齋文車講演　忠勇　鬼奴の團平

一立齋文車講演　怪力　金剛太郎

玉田玉秀齋講演　眞田家三勇士　猿飛佐助

玉田玉秀齋講演　眞田家三勇士　由利鎌之助

玉田玉秀齋講演　眞田家三勇士　霧隱才藏

松本金華堂發行

265
346

新講談續刊目次

柳亭燕枝 講演 千人塚の由來
柳亭燕枝 講演 高岡左次馬
玉田玉秀齋 講演 俠客業平文治
玉田玉秀齋 講演 俠客後の業平文治
玉田玉秀齋 講演 豪勇無双郷の虎丸

松本金華堂發行

大阪
松本金華堂
發行